

平成 31 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

高い知性、豊かな人間性、健やかな心身をもち、国際人として、将来、世界のさまざまな分野で活躍できる素質を育てる。

- (1) キャリア教育の充実を通じて子供たちが新しい時代、どのような社会でも生きていける力を醸成する。
- (2) 高い基礎学力と自学自習力を持った生徒の育成。
- (3) 学校行事・特別教育活動や部活動等とおして逞しい実行力、実践力を養う。
- (4) 国際理解教育と科学教育を専門学科として極めると同時に、両者のメリットを融合させ未来の世界をリードできる人材を育てる。

2 中期的目標

1. 新しい時代のキャリア教育

当校の今まで積み上げてきた資産を活かし、進路指導体制の改編（グローバルキャリア課新設）とその充実を通じ 21 世紀型キャリア構築へのサポートを実行する。主に以下の対応に強固な体制を作る。

目標：今後 3 年間で長期留学派遣 10 名以上。国内 SGU や海外直接進学などが行う多面的な評価での入試に強い学校を作り上げ、当領域での実績を伸ばす。

- ア 国内大学のグローバル化、海外大学進学ニーズへの対応。
- イ AO 入試や多面的評価入試（課題研究・長期・短期留学論文等）への対応。
- ウ グローバルキャリア観の醸成への対応。

2. 確かな学力への取組み

- (1) 「魅力的な授業」「わかる授業」の実現と自学自習習慣の確立。

目標：授業アンケート項目「生徒意識 1」「生徒意識 2」の肯定的回答の比率において毎年 85%以上を長期的に維持する。

目標：今後 3 年間で授業外学習時間を週 10 時間以上行う生徒を 60%まで伸長させる。

- ア 教員自らの学びを推進することで授業の質の向上をめざす。
- イ 授業アンケート結果に対して分析を行うことで、問題点を明確にして授業改善に取り組む。
- ウ 生徒の自学自習を支援し、自ら学ぶ力を深めるように助力をする。自習環境を整備し、自学自習の習慣の確立をめざす。

- (2) 国際理解教育の充実

目標：今後 3 年間で英検準 1 級取得者年 10 名以上を達成する。

- ア 国際人としての広い視野と感性を育て、グローバルな社会で活躍できる人材の育成を行う。
- イ コミュニケーション能力を向上させ、留学や、海外の大学への進学を推奨する中で、世界を視野に入れた人材づくりを行う。
- ウ SGH 指定校、ユネスコスクールの加盟校として、海外との交流を積極的に行い、体験活動を通して国際性に富む人材を育成する。
- エ TOEFL・TOEIC・英語検定などの資格試験に積極的に挑戦し、自ら語学力の向上を図る生徒を育てる。

- (3) 科学教育の充実

目標：科学系コンテストにおいて、年間に 3 件以上の入賞

- ア SSH 事業及びその人材育成枠の指定校として、その取組みを深め、世界で活躍できるグローバルな科学人を育成する。
- イ 五感で体得する理科授業をめざして、多くの実験実習を授業に取り入れ、その効果的な活用を行う教材を開発する。
- ウ 高大連携、大学訪問研修等を実施し、高校と大学の科学教育のスムーズな接続を行うとともに、生徒の学習意欲を高める。

3 進学保障

- (1) 生徒一人ひとりの進路について、自ら目標を立て、可能性を追求し挑戦する態度を養い、実現できる生徒を育成する。

目標：今後 3 か年で国公立大学合格者数 30 名以上、関関同立 180 名以上

- ア 進路情報の的確な提供と、きめ細やかな進路選択の指導を行う。
- イ 進学補習を計画的に実施し、進路を実現するための学力向上、家庭等での学習時間の伸長を支援する。

4 開かれた学校づくり

- (1) 学校の特色ある教育活動について、幅広く情報発信をすると共に、地域と連携し、「地域の教育拠点」としての機能を果たす。

- ア 様々な情報メディアを活用し、きめ細やかな情報の発信を行う。
- イ 学校説明会等を充実させることで、入学者に対して、本校の教育活動に対しての理解を深める。
- ウ 地域の小中学生や住民に対しての科学講座・英語講座を実施し、地域の科学教育、国際教育の中核としての地位の確立をめざす。

5 活気と規律があり、生徒が安心して生活できる学校づくり

- (1) 生徒一人ひとりを大切にするとともに、自主性の向上をめざす。

遅刻総数今後 3 か年（現約 2300 名から 300 名以上減）を目標 最終目標：遅刻総数 1500 名以下：部活動への入部率 85%以上。

- ア 個別に支援が必要な生徒への対応について、校内の組織を整備するとともに、きめ細やかな運用を実施する。
- イ 部活動を活性化し、参加者を増加させるとともに、その内容の充実を図る。また、学習と部活動を両立することのできる生徒を育てる。
- ウ 基本的な生活習慣を確立し、規律ある行動をとることのできる、社会性の豊かな生徒を育成する
- エ 生徒会活動を活性化し、学校行事やボランティアなどの体験的活動を充実させ、「生きる力」を育む。

6 教員の資質向上

- (1) 学校力向上のための職員研修の充実

- ア 教職経験の少ない教員のスキルアップ
- イ 職員研修の実施

- (2) 教員の働き方改革

- ア 時間外勤務の縮減
- イ 業務に応じた柔軟な勤務時間の割振り

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析（() 内数値は肯定率）	学校運営協議会からの意見
<p>生徒について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・項目 1「泉北高校での充実感」(89.7%)についてほぼ 9 割の生徒が高校生活に満足している様子であるが、今年度新たに設定した項目 23「泉北生であることが誇り」(75.8%)については肯定率が 3/4 に留まっており、あらゆる教育活動のさらなる充実が必要である。 ・項目 8「異文化理解や国際交流、共生の学習の機会」(81.3%)、11・12の「進路指導・キャリア教育関連」(80.0%・81.4%)の肯定率は高位維持。引き続き各取組みの充実を図りたい。 ・項目 9「平和、社会のルール、人権の尊重、生命の大切さなどについて学ぶ機会」(80.9%)についての肯定率が 9 ポイントアップした。人権HR等の充実とともに、スマホの使用マナー等、機を見逃さず指導した結果と認識している。 ・一方、項目 4「講習への参加」(46.7%)は半数以下であり、直接の声掛けを含め、参加意欲の向上を図りたい。 ・項目 14・15「地域との交流関連」(41.5%・31.8%)も 3～4 割に留まっている。地域の教育拠点校となるためにも、交流の機会と参加者数の増加を図る必要がある。 	<p>【第 1 回】(令和元年 7 月 5 日(金)実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・H30 年度の計画について、トピタテ！留学 JAPAN の人数だけが乖離しているが、それ以外はほぼ達成できている。 ・遅刻数が多い。遅刻の目標値についての評価が異なっているのではないかと。 ・英検合格者の総数について、学年ごとの目標値を設定した方が到達目標をたてやすい。 ・自主的で深い学びなど様々なキーワードがあるがどのように学んだかが大切。 ・泉北高校の取組みは 1 歩も 2 歩も進んでいる。 ・卒業生たちが、大学卒業後何をしているのかなどがわかるとよい。 ・進学保障について、進学を希望していた生徒は何%なのか。めざしていた数値と達成した数値の両方を考えたほうがよい。 <p>【第 2 回】(令和元年 11 月 22 日(金)実施)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出退勤の把握方法についての確認 ・クラブ入部率について

<ul style="list-style-type: none"> ・項目27・28「計画的な学習」(30.1%・26.9%)については3割ほどしか浸透していない。手帳等を活用した学習のスケジュール管理の徹底を図りたい。 保護者について ・生徒と同様、項目1「泉北高校での充実感」(83.2%)、8「異文化理解や国際交流、共生の学習の機会」(91.7%)の肯定率は高く、本校の教育活動について、全体的に理解を得ていると考えられる。 ・項目7「学校行事関連」(85.9%)、16「生活指導関連」(83.2%)についても学校の取組みを肯定的に捉えていただいている。 ・しかしながら、項目10「災害対応」(49.9%)、13「いじめ対応」(44.0%)の肯定率は低く、各種危機管理について教員側の準備と意識の徹底を図るとともに、生徒へのアプローチの工夫を検討したい。 ・項目14・15「地域との交流関連」(40.0%・41.7%)も生徒と同様の状況。生徒への指導とともに、保護者等への情報発信の充実を図りたい。 教員について ・すべての項目で肯定率が60%以上となるなど、相対的に高い自己評価であるが、例えば項目5「教育相談」(100%)や13「いじめ対応」(77.5%)、14・15「地域連携」(61.3%・61.3%)については生徒・保護者との認識に乖離が見られる。自戒して取組みを進めるとともに、生徒の気持ちに寄り添った指導に努めたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遅刻について、高校と大学での指導との違いについて ・発達障がいと認識している生徒については、保護者等が認識していない場合がある。対応がなかなか難しい。カウンセリングも必要。 ・ジェンダー問題を抱えている生徒の対応について ・長期留学の期間について、3年間で10名は難しいのではないかと。 ・学外学習について、受験勉強の最短ルートは授業を授業時間に理解する事が大切。大学では「前回授業の復習として小テスト」「授業終わりに毎回『今日の授業で分かったこと・わからなかったこと』を記入」を実施している。 ・SSH事業の取組みについて、高大連携をもっと積極的に活用して頂きたい。 ・SGH事業終了後のSGH以外の事業への参加について ・SSH、SGHで学んだ生徒について、その生徒の追跡調査をしているか？「高校生の学び」がどのように活かされているのか？海外と比較し、OB活動が日本は弱い。繋がりを強めることで、様々な取組みに強みが出る。 <p>【第3回】(令和2年2月7日(金)実施) 平成31年度学校経営計画及び学校教育自己診断結果について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英語力4技能の取組みについて文法の強化が必要。 ・部活動と学習の両立肯定率について、自己肯定感や、成績がそれなりに取れているという感覚を数値にしても、あまり意味がない。 ・メルマガ登録について、登録数は多いが、実際に活用している人の数が不明。 ・誇りは卒業時に持つもので、「誇りを持っているか」という質問を1、2年に聞いても分からないのではないかと。大学では卒業アンケートで聞くことがある。 ・必須項目での教員と生徒の数字の乖離をなくす努力してほしい。 ・教育相談や学習指導について、生徒から見ても高い数値(80%)を取るべきである。 <p>令和2年度学校経営計画について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学教室の開催に係り、若松台中学校が理科の先生に大変お世話になり感謝している。科学教室と同様に英語教室なども実施してくれたらありがたい。 ・近隣の学校との交流について、先輩(中学校の卒業生)が関わってくれたら良い刺激になると思う。 ・泉北コミュニティに泉北高校のことが書かれている。大学に何人入れたかではなく、卒業した後のキャリア形成をもっと宣伝したらよい。 ・地域密着型は珍しい。堺市との連携がめだってきている。大人と連携するのは素晴らしい。グローバルな取組みは独特で素晴らしい。
---	---

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標(()内はH30年度実績)	自己評価
1 育 新 し い 時 代 の キ ャ リ ア 教 育	ア 国内大学のグローバル化、海外大学進学ニーズへの対応 イ AO入試や多面的評価入試(課題研究・長期・短期留学論文等)への対応 ウ グローバルキャリア観の醸成への対応	ア・イ・ウ 新たな時代の潮流を見据えた進路指導体制を拡充する。 ・グローバルキャリアと進路指導との結合組織へ発展。 ・課題研究への取組みと進路への導線づくりのため、生徒の3年間の取組みのポートフォリオを作成する。 ・SGH・SSHの統合的取組みを進路実現に結びつける。SGH・SSH枠での受験とともに、国内SGUへの進学を推奨する。 ・海外修学旅行を実施する。また、短期海外研修を実施するとともに海外の高校との国際交流を受け入れる。 ・海外進学や留学の説明会を行い、留学や海外の大学への進学推奨を一層進める。	ア・イ・ウ ・長期留学派遣年3名以上(2名)	・長期留学者1名 短期留学者2名(比' 劣留学) () 次年度は海外との交流を評価指標に入れる予定
2 慣 の 確 立 授 業 の 実 現 と 自 学 自 習 の 確 立 「 確 か な 学 力 へ の 取 組 み 」 「 魅 力 的 な 授 業 」 「 わ か る 」	ア・イ 授業改善 ウ 自学自習の習慣確立	ア・イ ・先進的な授業を視察・報告するとともに、テーマを定めた研究授業を実施する。 ・授業評価アンケート結果をもとにした研究会を実施する。 ・授業見学期間(6月、11月)を実施する。 ウ ・自習室の環境向上に努め、利用の推進を図る。 ・SMS(セルフ・マネージメント・シート)または手帳を活用し、授業外学習時間の増加をめざす。 ・卒業生を活用し、学習活動をサポート(多言語学習支援等)する。	ア・イ ・生徒による授業アンケートの肯定率 「(項目8)興味関心」85%以上(81.3%) 「(項目9)知識技能」85%以上(83.3%) ・テーマを定めた研究授業を学期毎に実施 ・授業見学を行った教員80%以上(81.5%) ウ ・授業外学習時間 週10時間以上の割合25%以上(23.3%)	ア・イ ・授業アンケートの肯定率 興味関心80.2% () 知識技能82.5% () ・研究授業 1学期及び3学期 初任者研修 () 2学期 教員授業研修 () ・授業見学を行った教員 47/57名:82.5% () ウ ・授業外学習時間 週10時間以上 26.9% ()
(2) 国 際 理 解 教 育 の 充 実	ア・イ・ウ・エ ・グローバル人材の育成 ・SGH事業の推進 ・英語力の底上げ ・国際文化の把握と興味の維持	ア・イ・ウ・エ ・SGH事業を推進する。 ・NETを効果的に活用し、英語によるプレゼンテーション能力及び会話力を向上させる。 ・1・2年生徒全員に英語検定を受験させ、生徒の英語4技能の能力向上を図る。 ・スピーチコンテスト(2学年)及びレシテーションコンテスト(1学年)を実施する。 ・総合科学科において、「科学英語プレゼンテーション」を開講し、課題研究等において英語での口頭発表やポスター発表を実施する。 ・総合科学科のグローバルコース選択生は、研究成果を英語で発表できることをめざす。 ・ユネスコスクール全国大会等に参加し、交流を深める。	ア・イ・ウ・エ ・英検2級取得者100名以上(124名) ・総合科学科課題研究の発表概要を全グループが英語で実施 ・ユネスコスクール全国大会等への参加年1回以上	ア・イ・ウ・エ ・英検2級93名 準1級4名 1級1名 () ・総合科学科課題研究について アブストラクトを英語で表記し、発表 () ・ユネスコスクール全国大会11/30(広島県福山市)に参加 ()

府立泉北高等学校

(3) 科学教育の充実	<p>ア・イ・ウ・エ</p> <ul style="list-style-type: none"> SSH 事業の推進 グローバルな科学人の育成 五感で体得する理科授業 高大連携 	<p>ア・イ・ウ・エ</p> <ul style="list-style-type: none"> 課題研究の成果と進学実績への結びつきを意識して、国公立大学の A0 入試や公募推薦での合格をめざす。 課題研究を深めて、科学系コンテストや学会での発表件数を増加させ、コンテストでの入賞をめざす。 理数理科での実験実習の実施率を維持するとともに、より効果的な新しい実験・実習に取り組む。 高大連携講座や大学訪問研修を発展的に継続し、講座の参加人数、訪問する研究室数を昨年並みか、それ以上とする。 海外高校生との合同研究や発表を行う。 	<p>ア・イ・ウ・エ</p> <ul style="list-style-type: none"> 国公立大学の A0・公募推薦の合格者 5 名以上 (3 名) 科学系コンテストや学会での発表件数 5 テーマ以上、入賞 3 件以上 実験の実施率 30%以上 (30%) 高大連携講座の参加者延べ 160 人以上 (154 名) 大学訪問研修 29 研究室以上 (29 研究室) 海外との合同研究発表年 1 回以上 	<p>ア・イ・ウ・エ</p> <ul style="list-style-type: none"> 国立大学 1 名 () 科学系コンテスト【入賞】大阪府学生科学賞《優秀賞 1 佳作 3》 日本地質学会第 126 年学術大会(山口)《優秀賞 1》 大阪サイエンスデイ 1《銀賞》【発表】SSH 生徒研究発表会(全国) 1 大阪サイエンスデイ 2 科学の甲子園出場 (その他 SGH 関係 5 件) () 実験実施率 28.0% () 高大連携講座参加者数 158 名 大学(府大・近大)訪問研修計 28 研究室 () 12 月に台湾彰化高級中学と合同発表 ()
3 進学保障	<p>ア・イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 進路情報の提供 補習等の実施 	<p>ア・イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 高い目標を持ち、進路実現に向けて挑戦する態度を養う。 進路 HR で進路選択に関わる情報提供(大学・予備校の講師による進学講話等)を行う。 オープンキャンパスへの積極的な参加を奨励する。 校内実施の外部模試受験により、学力状況の共有と学習目標設定への活用を図る。(データ分析に基づいた科学的なアプローチによる学力向上を図る。) 長期休業中の希望講習の充実に努める。 	<p>ア・イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 国公立大学合格者数増(26 名) 関関同立合格者数 15%増(123 名) オープンキャンパスに 2 年生全員が参加 外部模試の校内実施 1 年 1 回以上、2 年 2 回、3 年 3 回 	<p>ア・イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 国公立大学合格者 27 名 関関同立合格者 128 名 () オープンキャンパス 2 年生全員参加 () 外部模試 1 年 1 回(11 月) 2 年 2 回(11・1 月) 3 年 4 回(6、9、10、11 月) ()
4 開かれた学校づくり	<p>ア 様々な情報メディアの活用と情報発信</p> <p>イ 学校説明会等の充実</p> <p>ウ 地域の小中学生や住民に対する科学講座・英語講座の実施</p>	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校 HP の役割を明確にして、在校生保護者の利便性を高め、SSH・SGH 校間の連携を強化する。 月刊学校新聞およびメールマガジンを発行し、保護者への学校行事活動の周知を行う。 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 体験授業やクラブ体験、ミニオープンスクールなど、学校説明会を充実させる。 <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 小中学生対象の科学教室・英語教室を定期的・継続的に実施する。また、夏期休暇中に自由研究の指導なども行う。 地域住民対象に、自然観察講座や実験講座を開催する。 	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校 HP の更新 80 回以上(116 回) 学校新聞の毎月発行、メールマガジン登録者数 800 名以上(848 名)、配信回数 70 回以上(67 回) <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校説明会等の実施 2 回以上 <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 開催実績 	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> HP 更新 134 回 () メルマガ登録者数 1202 名 配信回数 75 回 () <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内学校説明会(9 月・11 月) 第 1 回 480 名(生 299 保 181) 第 2 回 545 名(生 310 保 235) () <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 泉北子ども科学教室(7 月) 85 名 若松台中学校 3 年対象科学教室(10 月) 126 名 大阪シニア自然カレッジ(7 月) 25 名 ()
5 できる学校づくり、生徒が安心して生活	<p>ア 校内の支援組織の整備</p> <p>イ 部活動の活性化と学習と部活動の両立の促進</p> <p>ウ 基本的な生活習慣の確立</p> <p>エ 生徒会活動の活性化</p>	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校生活支援カードを活用し、情報共有を図るとともに個別の支援を必要とする生徒への包括的な支援体制を充実させる。 相談室機能を充実させ、課題や悩みを抱える生徒の状況把握などに組織的に取り組む。 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 体験入部の期間の設定や、中学生対象の体験入部など、部活動の活性化に向けた取組みを実施する。 部活動参加者の進路実現に向けて、学習意欲向上に向けた分析と対策を実施する。 <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 遅刻の実態調査と原因分析を行うことにより遅刻を減少させ、生活規律を向上させる。 <p>エ</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校行事やボランティアなどの体験的活動の充実を図るとともに、生徒の自主的な運営を支援する。 	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 支援会議の隔週開催 学校教育自己診断(生徒)における「相談体制」の肯定率 60%以上(59.1%) <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 入部率 85%以上(83.5%) 学校教育自己診断(生徒)における「部活動と学習の両立」の肯定率 50%以上(51.2%) <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 遅刻者数年間 2,000 名以下(2,662 名) <p>エ</p> <ul style="list-style-type: none"> 「生徒の生徒会行事参加」の肯定的回答 80%以上(74.1%) 	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 支援会議隔週開催 () 「相談体制」肯定率 61.8% () <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 入部率 79.4% (7/1 現在) 1 年 91.4% 2 年 80.1% 3 年 66.3% () 「部活動と学習の両立」肯定率 55.4% () <p>ウ</p> <ul style="list-style-type: none"> 遅刻者数 2641 名 一部事情のある生徒分を含む () <p>エ</p> <ul style="list-style-type: none"> 「生徒の生徒会行事参加」肯定率 75.1% ()
6 (1) 教員の資質向上のための職員研修	<p>ア 教職経験の少ない教員のスキルアップ</p> <p>イ 職員研修の実施</p>	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 教職経験 3 年目までの教員を対象とした研修を実施し、若手教員の資質向上を図る。 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 職員人権研修を計画的に実施し、教員の人権感覚の向上に努める。 	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 実施実績 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 職員人権研修 年 2 回実施(2 回) 	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 初任者及び 3 年目までの教員対象の研修会を実施 () <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 職員人権研修(5 月・11 月) 第 1 回「帰国生の支援」 第 2 回「発達障がいのある生徒支援」 ()
(2) 教員の働き方改革	<p>ア 時間外勤務の縮減</p> <p>イ 業務に応じた柔軟な勤務時間の割振り</p>	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> ノークラブデー、一斉退庁日を活用し、時間外勤務の縮減を図る。 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 電話当番等における時差出勤の積極的活用を図る。 	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 1 ヶ月の在校等時間 60 時間以内の教員数 8 割以上 <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 時差出勤活用教員数 5 割以上 	<p>ア</p> <ul style="list-style-type: none"> 在校等時間 60 時間以内の教員数 93.5%(58/62 名) () <p>イ</p> <ul style="list-style-type: none"> 16.1%(10/62 名) のべ 18 名) 勤務実態及び希望に即して活用 ()